

## 武蔵野日曜聖書講筵 復活節祈禱会

## 復活の現象

——ルカ伝第24章32～49節——

1993年4月11日

小池辰雄

うるわしき魂 キリストの霊生をたまわる キリストに圧倒されて生きている こちら側を問  
題にしない キリストと渾然一如にされる 一人びとりが絶対的な愛を受けている

## 【ルカ24】

32 かれら互に言う『途にて我らと語り、我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』33 かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言う、34 『主は実に甦えりて、シモンに現れ給えり』35 二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うによりてイエスを認めし事とを述ぶ。36 此等のことを語る程に、イエスその中に立ち『平安なんじらに在れ』と云い給う。37 かれら怖じ懼れて、見る所のものを霊ならんと思いに、38 イエス云い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、39 我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』40 「斯く言いて手と足を示し給う」41 かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、イエス言いたもう『此処に何か食物あるか』42 かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、43 之を取り、その前にて食し給えり。

44 また言い給う『これらの事は我がなお汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言いし所なり』45 ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う、46 『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦えり、47 且その名によりて罪の赦を得さする悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの国人に宣伝えらるべしと。48 汝らは此等のことの証人なり。49 視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留まれ』

## ●うるわしき魂

讚美歌の512番は私の最も好きな讚美歌のひとつです。



「わがたましいの したいまつる  
イエス君のうるわしきよ  
あしたの星か 谷のゆりか  
なにになぞらえてうたわん」

「うるわしき」というのは、うるわしき魂、魂のうるわしきさです。「シエーネ・ゼーレ」（うるわしき魂）というゲーテの詩を思い出します。「あしたの星」は黙示録にも書いてあるとおり。「谷のゆり」は復活のキリストの象徴です。

「いざなつもの ふかきたくみ  
やぶりたもつれしきよ  
ひとは棄つれど きみはすてず  
みめぐみはいやまさらん」  
私は特に第2節の

「ひとは棄つれど きみはすてず」  
というところが好きです。

ゲーテの『ファウスト』の中に「天使の合唱」という所（797～807行）がある。  
「キリストは滅びの胎から甦りたもつた。

この滅びの地上から、ということ。  
彼はお前たちを喜ばしくも  
いろいろなきがなから引き裂いてくださった。  
行為をもって彼を讃めたたえる者

別なところで、「行為によつて認識する」「行為は一切である」「初めに行為あり」という言葉もある。ゲーテは言葉の人だけれども、非常に行為ということを言っている。別な言葉でいうと実存です。

行為をもって彼を讃めたたえる者  
愛を証しする者  
兄弟たちに困っていたら食物を与える者  
伝道しながら旅をする者  
喜びを約束する者  
そついったお前たちのところに彼（キリスト）は居たもつ

ゲーテというひとはやはり本当の現実をみている人です。非常に素晴らしい句だと思えます。

### ●キリストの霊生をたまわる

題に「復活の現象」と書きました。これはルカ伝24章のところを読んでいて思いついた。



38 イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、<sup>39</sup>我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』  
 甦りのキリストが霊肉渾然たる存在で、しかもそれは実に、我々の想像を絶した現実をもつている。

40 「斯く言いて手と足を示し給う」<sup>41</sup>かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、

あまりうれしくて、信ずるのでなくて怪しんだという。これは非常におもしろい言い方です。

イエス言いたもう『此処に何か食物あるか』<sup>42</sup>かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、<sup>43</sup>之を取り、その前にて食し給えり。

甦りのキリストがお魚を食べた。この句から「復活の現象」という題をつけた。

<sup>44</sup>また言い給う『これらの事は我がな汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言ひし所なり』<sup>45</sup>ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う、<sup>46</sup>『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦えり、<sup>47</sup>且その名によりて罪の赦を得さす悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの国人に宣伝えらるべしと。<sup>48</sup>汝らは此等のことの証人なり。<sup>49</sup>視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留まれ』

彼ら弟子たちはそこで「証人」であったから、我々もまたキリストの証人でなければならぬ。キリストの霊生をたまわれば、私たちは、

「我を見よ、わがうちにキリストあり」

という証人でなければならぬわけです。

「我を見よ、我はキリストの証人である」

というときの、「我」はもはや相対的な我ではない。霊生の我です。そういうことをはつきり言えなければ、それは本当のクリスチャンではないと私は思う。

「まだ私の信仰は」

なんて言っているクリスチャンはダメなんだ。信仰なんか絶すればいい。絶信の信の世界です。

●キリストに圧倒されて生きている

要するに、キリストに圧倒されて生きている。こちら側の何ものでもない。キリストに圧倒されていると、「我を見よ」ということが言える。私の本願はそういう本願です。いわゆる信仰上の問題なんてものがなくなってしまう。非常に簡単になってしまう。



一遍上人が、

「もう自分の信仰ではない。弥陀の本願に圧倒されている」

ということを言っている。まだ、法然や親鸞は自分の信仰の側を問題にしたが、そんなものはや問題ではないという世界に入ってしまった。こちら側が信ずるの信じないのということではない。私は、

「圧倒されている」

という言葉が非常に当たっていると思う。太陽の光に貫かれているような現実です。

<sup>39</sup>我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、

我にはあり、汝らの見るごとし』

これはキリストの霊体です。パウロがコリント前書15章の終りの方で言っている霊体です。

「<sup>42</sup>死人の復活もまた斯のごとし。朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦え  
らせられ、<sup>43</sup>卑しき物にて播かれ、光栄あるものに甦えらせられ、弱きもの  
にて播かれ、強きものに甦えらせられ、<sup>44</sup>血氣の体にて播かれ、霊の体に甦  
えらせられん。血氣の体ある如く、また霊の体あり

「霊の体に甦えらせられん」とちやんと書いてある。

<sup>45</sup>録して始の人アダムは、活ける者となれりとあるが如し。而して終のアダ

ムは、生命を与うる霊となれり。

「終のアダム」とはキリストのことです。

「生命を与うる霊」

と、ちやんと書いてある。

<sup>50</sup>兄弟よ、われ之を言わん、血肉は神の国を嗣ぐこと能わず、朽つるものは  
朽ちぬものを嗣ぐことなし。<sup>51</sup>視よ、われ汝らに奥義を告げん、我らは悉と  
く眠るにはあらず、<sup>52</sup>終のラツパの鳴らん時みな忽ち瞬間に化せん。ラツパ  
鳴りて死人は朽ちぬ者に甦えり、我らは化するなり。<sup>53</sup>そは此の朽つる者は  
朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るべければなり。<sup>54</sup>此の朽  
つるものは朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るとき『死は勝  
に呑まれたり』と録されたる言は成就すべし。<sup>55</sup>『死よ、なんじの勝は何処  
にかある。死よ、なんじの刺は何処にかある』<sup>56</sup>死の刺は罪なり、罪の力は  
律法なり。<sup>57</sup>されど感謝すべきかな、神は我らの主イエス・キリストにより  
て勝を与えたもう。<sup>58</sup>然れば我が愛する兄弟よ、確くして揺くことなく、常  
に励みて主の事を務めよ、汝等その労の、主にありて空しからぬを知らばな  
り。』(コリント前書15・42〜58)

パウロの書翰も、パウロは感嘆してものを言っている。説明しているのではない。告白  
している。およそ説明は大したことはない。全部、本ものは告白です。文学でもそうです。



「自分の文学は全部告白だ。頭で考えて書いていない」とは、ゲーテの言葉です。

### ●こちら側を問題にしない

キリストの霊体の現象は、このようにして、お魚を食べた。私が「復活の現象」と言ったのは、ルカ伝24章の終りの所から思いついた。

霊体は、霊生の新しい霊体は、幽霊ではないから、食べる。私たちは根源的に内側は、そのような霊体にされているわけです。二重構造だけれども。この霊体を既にいただいている。死んでも死なないわけだ。霊体の核ができています。古い衣を脱ぐように、ちゃんと内側にはもう滅びないものができている。魂は、

「魂たましひ之霊」

と書かなくてははいかん。

「魂は霊に向かつて之ゆ」

ということですよ。

そうすると、それは現象を起こす。食べる。本当にキリストの霊体は物を食べたんだ。大変なものだ。本当の霊の現実というのは超絶的な内容だ。こういうキリストの現実をジーツと瞑想してごらんなきい。祈り瞑想するとも言うかな。そうすると、そういう現実の中に自分が置かれるのを感じる。そうになると、もう絶言絶慮だ。

私は夜、眠る前の静かな時とか、朝起きて最初の時とかに祈る。夜中に目が覚めて急に坐って祈ったりする。別に気持は決まっていますませんが。もうじき90歳にもなつてやつとこんなことを言っている。あなた方は若いのだから、もの凄いとこに入ります。キリストの直弟子の次元、使徒的次元に、私たちはそこに入らなかつたならば、つまらないよ。その証し人として、あなた方は特別な使命がある。

信仰や信頼というのと、こちらの魂や心の状態が非常に問題になる。

「本当に信頼しているか」

なんて。そんなことをやっていたら、くたびれてしまう。

「お任せします」

とは、よく言われる言葉です。「お任せします」ではない。

「圧倒されています」

の方がいい。こちら側を問題にしていけない世界は圧倒されている世界です。こちら側を問題にしているのは、信頼とか信仰とかまだ言っているわけだ。まだ余地がある。余地がある世界は本当はまだダメなんです。非常に乱暴な言葉を使うと、

「どうにでもなりやがれ、勝手にしやがれ」

という世界なんです。そうすると、そういう世界は上からの気合が入ってきて、力が来て、



もの凄い。なるほど、一遍さんが言っているとおりだ。まだ、法然や親鸞は一生懸命で「本願へこちらの心を託す」というような心の余裕がある。本当の世界はそういった心の余裕の無い世界です。まあ皆さん、一応、私の話を聴いておいてください。

### ●キリストと渾然一如にされる

それで、さつき午前の集会で、「復活の本質」と言いました。本質が本ものだと、これは現象せざるを得ない。だから、内と外は内外相即する。内も外もなし。

やはり、ゲエテという人はそういう世界に入っていた。

「ヴェーゼン」(本質)と「エアシャイヌング」(現象)

が一つになる。なぜゲエテが大詩人かというところ、そういう境地を持っているからです。漱石なんかとても彼にはかなわない。いろいろなものをもっていますけれども、ゲエテという人は凄いな。だから、『ファウスト』の最後にああいうコーラスをつくった。

「名状しがたきものがここでは既に成っている」

という。「ここでは」とは天界のこと。ゲエテの最後の現実はそのいう所に入ってしまった。本体と現象とが、本質と現象とが実は相即する。相即の世界です。何でも本ものの世界は全部一如なんです。渾然一如です。この罪びとがキリストと渾然一如にされるわけです。

キリストがペテロの足を洗おうとしたら、ペテロは

「もつたないから、足を洗わないでください」

と言った。キリストは、

「お前の足を洗わなかったら、私とお前とは関係がなくなるぞ」

と言われた。私たちはキリストに足を洗っていただいた人間で、遠慮することはない。

「ありがとうございます！」

と。無条件にありがたいんです。遠慮でなくて、平伏しです。平伏しのありがたいさんなんです。恵みは無条件に受けとる。

「それでも、まだ私は」

なんて、自分を考えることはひとつもない。一如とされている。これが信仰の本当の現実です。パウロが、

「われもはや生くるにあらず。キリストわがうちにありて生き給うなり」

とガラテヤ書で、また、

「このキリストの愛から離れしむるものは何ものがあるか。何もないぞ」

と、ローマ書8章の終りの方で告白している。

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」

という親鸞の告白がある。



「福音はこの罪びとの首かしらパウロひとりのためであった」と、そういう調子なんだ、あのパウロというのは。我々一人びとりがそのところに来ないとダメです。

「キリストの福音は全く私のためだった。その他のことは知らん」というわけです。

エマオ途上でキリストを招きいれて、そして、いぎ、パンをさいたら、キリストがスツと見えなくなった。これはレンブランチの絵があるが、実におもしろい絵だ。

何といつても、福音書は全聖書の中心です、キリストの直かのところですから。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ。全聖書からどこをちぎってポケットに入れるかというと、福音書です。旧約ではイザヤ書です。福音書は既に黙示録の終末の世界を現実に行っている。イエスは神の国を現しながら歩いているひとだからね、大変な霊止ひとだ。

「天国は近づけり」  
ではない、

「天国はここだぞ」

ということですよ。イエスは天国、天体だから。東西古今、キリストに比較できるひとは他に絶対ありません。全く唯一人者です。それほどの主さまです。私たちはもう説明は要らん。後は、圧倒されて生きるだけのほなしです。

### ●一人びとりが絶対的な愛を受けている

キリストはあなた方一人びとりを本当にその人らしく愛している。キリストの愛は、その中身はみな違う。その人に最も適するような愛し方をしていらつしやる。愛とは個別的なものです。比較を絶した世界です。

「キリストはあの人をだいぶ愛しているようだが、私はどうだろうか？」

なんて、そんなことではない。一人びとりが絶対的な愛を受けている。そのことを感ずるまでは本ものにならない。

「この愛から離れしむるものは何ものがあるか」

とパウロが叫んでいる。キリストに一番逆らっていたパウロがひっくり返ってしまった、そういうことになった。

「<sup>22</sup>われ中なる人にては神の律法を悦べど、<sup>23</sup>わが肢体のうち<sup>のり</sup>に他の法ありて我が心の法と戦い、我を肢体の中にある罪の法の下に虜とするを見る。<sup>24</sup>噫われ悩める人なるかな、此の死の体より我を救わん者は誰ぞ。<sup>25</sup>我らの主イエス・キリストに頼りて神に感謝す、然れば我みずから心にては神の律法につかえ、肉にては罪の法に事うるなり。」(ロマ7・22～25)

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。<sup>2</sup>キ



リスト・イエスに在る生命いのちの御霊のりの法は、なんじを罪と死との法より解放ときほなしたればなり。

「なんじ」というのは「われ」というのと同じです。

<sup>3</sup> 肉により弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣つかわし、肉に於て罪を定めたまえり。<sup>4</sup> これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義まじしの完まじうせられん為なり。<sup>5</sup> 肉にしたがう者は肉の事をおもい、霊にしたがう者は霊の事をおもう。<sup>6</sup> 肉おもいの念は死なり。霊の念は生命なり、平安なり。

そのとおりです。

<sup>7</sup> 肉の念は神に逆う、それは神の律法しだがに服したがわず、否したがうこと能わず、<sup>8</sup> また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。<sup>9</sup> 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。」(ロマ8:1～9)

と。パウロを読めばパウロとなり、ヨハネを読めばヨハネとなり、ペテロを読めばペテロとなる。そういう自在な読み方ができるようになる。

「そうだよ、その通りだよ」

と。ということは、彼らは本当に告白しているから。説明や教えはダメ。本ものは全部告白です。

先生の講義もそうです。告白的な講義は人を打つ。

「こうしろ、ああしろ」

というのはダメなんだ。とにかく、自己を偽らずに、その瞬間において全我を投じていくことが一番です。その時は人は怪しんでも、必ず後で、

「やつぱりあれは本ものだ」

ということが分かるから。ウソものか本ものかは、時がたつと分かる。

内村先生というのとはなかなか欠点のある人だけれども、その瞬間においては全我を投ずるようなものの言い方をしている。昨日言ったことと、今日言ったことが矛盾している。いいんだよ、矛盾していい。その瞬間においては、そういう告白をせざるを得ない。そういうところは内村先生のよきだった。

人間の、その人の本当のよきというもの、中心はどれかということを見なければいかん。誰だってみな欠点はあるんだから。そして、その点においてお互いに交わっていけば間違いなしというわけです。

